

韓国語を母語とする日本語学習者における 日本語オノマトペの習得と母語からの影響

1032151 吉成俊裕

指導教員：山崎治 准教授

1. はじめに

近年、日本語学習者が増えている。しかし、日本語には、オノマトペ（擬態語、擬音語など）が多く存在し、習得は難しいとされている。中石ら（2011）は、中国語母語話者の日本語学習者を対象にオノマトペの習得調査を行った。調査の結果は、作文課題とアニメーション課題の二つの正解率が3割を満たさないという結果だった。その理由の一つとして、中国語自体にオノマトペが多くないことが挙げられる。

そこで、日本語と同程度あるいは日本語以上にオノマトペが多い韓国語に着目した。韓国語母語話者では、日本語オノマトペの習得状況が先行研究と同様の結果となるのか調べる。この調査によって、日本語オノマトペの学習における困難さの理由を明らかにできることが期待される。

2. 目的

本研究では、韓国語を母語とする日本語学習者が日本語のオノマトペをどの程度使用できるのかを明らかにし、さらに、オノマトペの習得に母国語からの影響があるかを明らかにする。また、日本語のオノマトペの使用にどのような間違いの傾向があるかを明らかにする。

3. 調査

日本語・韓国語オノマトペの単語の音が似ているものと似ていないもので問題を構成し、オノマトペの習得状況の調査を行う。

3.1 方法

調査対象：韓国語母語の日本語学習者 13 名

（日本語能力試験 1 級 5 名/2 級 8 名）

調査内容：日本語学習経験についてのアンケートと 2 種類の問題を用意した。日本語オノマトペの意味や正しい文を問う「文章課題」として 34 個のオノマトペを選定し、5 択の択一式設問として作成した。オノマトペの選定には、日本語オノマトペと韓国語オノマトペで音が似ているもの、似ていないものを考慮して選定している。また、提示された状況に対して適切なオノマトペを産出する「アニメーション課題」として 4 個のオノマトペを選定し、自由回答として作成した。提示するアニメーションは wmv 形式で作成し、Youtube にアップロードした。

材料：問題文および解答欄を、Google ドライブのシート機能を利用し、調査用 Web ページとして作成した。Web ページの先頭に研究目的および実施にあたっての注意事項、研究倫理に関する特記を記載した。また、韓国語を母語とする日本語学習者には、日本語学習経験などのアンケートも記載した。

手続き：調査対象者には、個別にメール等で調査用 Web ページの URL を知らせた。調査対象者は各自で Web にアクセスしやすい環境（例えば、自宅 PC など）を用いてもらい回答をしてもらった。

3.2 結果

韓国語母語話者が日本語オノマトペをどの程度正しく使用できるのかを調べた。表 1 に 2 つの課題の正答率を表す。アニメーション課題に対しては事前に行われた 22 名の日本人を対象とした予備調査に基づき、日本語母語話者が最も多く答えた回答を正解と設定している。

表 1：平均正答率

	正答率
文章課題	55%
アニメーション課題	35%

日本語上級者を対象にしているが、表 1 を見ると結果は良いとは言えない。しかし、中石らの先行研究と比べると韓国語母語話者の正答率がより高かった。文章問題において、予備調査の結果と対照し、正解率に有意差があったオノマトペは 23 語であった。他方、日本人との正解率に差が見られないオノマトペは 11 語あり、それらは、日常生活でよく耳にするものが多い傾向がみられた。

次に、韓国語として類似する音のオノマトペがあるものとないものとの正答率の差に着目した。

表 2：音韻的に類似するオノマトペの有無による平均正答率

	正答率
類似する音がある（13 語）	44%
類似する音がない（17 語）	61%

表 2 に、音韻的に類似するオノマトペの有無における平均正答率を表す。t 検定の結果、2 つのオノマトペのグループ間に有意差が見られ、韓国語として類似する音がないオノマトペにおいて正解率が高くなることが明らかとなった ($t(22.66)=2.73, p<.01$)。

4. まとめ

結果から日本語オノマトペの習得の難しさや教育不足が明らかになった。また、正答率が高いものは、日常生活でよく耳にするものが多かったため、学習において覚えたものではなく、目や耳で覚えたと考えられる。音により、正答率が変ることから韓国語と日本語で意味の混同が起きていると考えられる。今後、オノマトペをどう覚えたのか、また、音による意味の混同が本当に起きているのかアンケートやインタビューで調査する必要がある。

参考文献

中石 他(2011).「中国語を母語とする学習者は日本語のオノマトペをどの程度使用できるのか-アニメーションを用いた産出実験を中心として-」『中国語話者のための日本語教育研究』第 2 号 42-58